年号	干支	人名	摘要欄	改元
応永二七	庚寅	雪舟	(雪舟)備中赤浜(現岡山県総社市赤浜)に生まれた。	
応永二八			(雪舟)幼い頃、その宝福寺に入る。	
正長一			(雪舟)十歳頃京都の相国寺に移り、春林周藤に師事、禅の修行を積むとともに、天章周文に絵を学んだ。	
永享一				
嘉吉一				
享徳三			(雪舟)この頃周防に移り、守護大名大内氏の庇護を受け、国宝雲谷庵(山口県山口市)を構える。	
享徳二			(雪舟)遣明船で明へ渡航、各地を周り、約2年間本格的な水墨画に触れ、研究した。	
応仁二			(雪舟)帰国し、周防のほか豊後や石見で創作活動を行う。	
文明一三			(雪舟)秋から冬にかけ豊後へ旅行。	
文明一三				
文亀一			(雪舟)天橋立に絶筆作品を残した。	
永正三	丙辰		(雪舟)雪舟没す。八十歳 (没年は諸説あり(八十歳で没したとするものが多い)。最晩年は石見の大倉庵)	
永正四				
永正五				
永正六				
享徳一〇				
享徳一一	丙午	古川古松軒	(古松軒)備中国賀陽郡新本村(岡山県総社市)の富裕農家庄屋の家に生まれる。	
享徳一二				
享徳一三				
享徳一四				
享徳一五	庚戌			
享徳一六				
享徳一七				
享徳一八				
享徳一九				
享徳二〇	乙卯	西山拙斎	(拙斎)備中国賀陽郡西山村(現岡山県倉敷市)の富裕農家庄屋の家に生まれる。	
元文一				4・28
元文二				
元文三				
元文四				
元文五				
寛延一			(竹山)穏恬実、廉直である。	2・27
寛延二				
寛延三				
寛延四				
延享一				2・21
延享二	乙丑	伊能忠敬	(伊能)二月二日、上総国山辺郡小関村(現十葉県山武郡九十九里町小関)で名主五郎左衛門家に生まれる。	
延享三			(古松軒)二十歳のころ京都にきんだことを以外、知っているの古松軒については殆んど明らかでない。	
寛延一				
寛延二			(拙斎)大阪に出て、古林見宜塾に医学を、関宇宙に儒学を学ぶ。十六歳	
寛延三				
宝暦一			(拙斎)この頃までに家にあって父より学問を学ぶ。	7・12
宝暦二				
宝暦三				
宝暦四				
宝暦五				
宝暦六			(拙斎)上京して恩師宇宙に学ぶ。	
宝暦七			(松陰)新見藩領である備中国浅口郡西阿知村(現在の岡山県倉敷市西阿知町)に生まれる。	
宝暦八	戊寅	丸川松陰 / 良覚松尚	良覚松尚(竹山)学問は伊藤東涯に学ぶ。	
宝暦九				
宝暦一〇				
宝暦一一				
宝暦一二			(伊能)下総国香取郡佐原村の高橋家を営む伊能家に婿養子に入る。	
宝暦一三				
明和一			(拙斎)新鮮秘術と称して学問の問答をする。命家と共に程朱子説となる。名を正と改める。三十歳	6・02
明和二				
明和三				
明和四				
明和五				
明和六				
明和七				
明和八				
安永一			(竹山)十五歳になると恩師宇宙に学ぶ。四十三歳 (松陰)初めて二の家に生徒を集めて教授す。これまで両親に拙き修学せしが、十五歳に成ると恩師宇宙に学ぶ。四十三歳に至る。	11・16
安永二			(拙斎)京より真里に帰り、教授心身を慎み守る。を開く。三十九歳 (関西の孔子と称された。近郷の塾生に長屋村、小野郡月(俳号・詩人)、地頭上村、坪村子信等がいた。	

| 西暦 | 和暦 | | |

| | | |

明治一				
明治二				
明治三				
明治四				
明治五				
明治六				
明治七				
明治八				
明治九				
明治一〇	丁丑	山田方谷		
明治一一				
明治一二				
明治一三				
明治一四	辛巳		阪谷朗廬	
明治一五				
明治一六				
明治一七				
明治一八				
明治一九				
明治二〇				
明治二一				
明治二二				
明治二三				
明治二四				
明治二五	壬辰	鎌田玄渓		
明治二六				
明治二七				
明治二八				
明治二九	丙申		川田　剛	
明治三〇				
明治三一				
明治三二				
明治三三				
明治三四				
明治三五				
明治三六				
明治三七				
明治三八				
明治三九				
明治四〇				
明治四一				
明治四二				
明治四三				
明治四四				
大正一				
大正二				
大正三				
大正四				
大正五				
大正六				
大正七				
大正八	己未		三島　毅	
大正九				

明治一	〔豊江〕島司伏見の戦い、熊田死。
明治二	明廬、広島藩主より賞状として拝領を受け起任。
明治三	〔豊江〕松山藩は勝静を藩主として二万石として再興がなる。四十歳
明治四	〔方谷〕十月、刑部に往復を経転、弟子教育につとめる。 〔中州〕松山藩を敗せし、寒さ厳寒に寒さする。四十一歳
明治五	〔豊江〕太政官の命により、久代山中、黒谷と地の人は玄渓をくるだにと呼ぶに随様す。五十四歳 〔玄渓〕有終館教授を辞し、久代山中、黒谷と地の人は玄渓をくるだにと呼ぶに随様す。五十四歳
明治六	三島、中央において判事、新治裁判所長。
明治七	明廬、陸軍省八等出仕、地理書編集。
明治八	〔玄渓〕山田方谷の薦めにより、関谷校教授となる。
明治九	明廬、阪谷邸に入り、文学委員講師となる。
明治一〇	〔方谷〕高梁藩に勝静を訪ず、再会する。勝静の長期での帰治は三日にわたる。 〔玄渓〕開学教授を辞ず、再会する。勝静の長期での帰治は三日にわたる。 明廬、大蔵官院御用係（司法省）。 〔中州〕大蔵官院判事。
明治一一	明廬、西村茂樹（岩田王様）の薦で、侍従取調御用掛（と共に終身俸禄を設け国民道徳昂揚を指導）。
明治一二	明廬、内務省警視局御用係。
明治一三	
明治一四	〔中州〕東京帝国大学予科教授。 〔方谷〕三月十五日、小石川区春日町の邸で永眠、谷中大正寺墓地に葬る。 明廬、三月十五日、小石川区春日町の邸で永眠、谷中大正寺墓地に葬る。
明治一五	
明治一六	
明治一七	
明治一八	
明治一九	
明治二〇	〔豊江〕文学博士の学位を受ける。五十九歳
明治二一	
明治二二	〔豊江〕宮内省講師を辞す。東京御用係を仰せつかる。
明治二三	
明治二四	
明治二五	〔玄渓〕赤穂塩屋村に没死。七十六歳
明治二六	
明治二七	
明治二八	
明治二九	〔豊江〕二月二日東京本郷に没す。東京駒込吉祥寺の板倉松堂候墓側に葬られる。六十七歳 〔中州〕東京帝国大学教授として皇太子の教育にあたる。
明治三〇	
明治三一	
明治三二	
明治三三	〔中州〕文学博士の学位を受ける。宮中顧問官、宮内省御用掛仰せつかる。七十三歳
明治三四	
明治三五	
明治三六	
明治三七	
明治三八	
明治三九	
明治四〇	
明治四一	
明治四二	
明治四三	
明治四四	
大正一	7-30
大正二	
大正三	
大正四	鎌田玄渓没後二十三年、羽黒神社境内に顕彰碑建立。三島中州撰。
大正五	
大正六	
大正七	
大正八	〔中州〕五月十二日、没す。東京大田区本門寺に葬る。九十歳
大正九	

参考資料・文献
△丸川松陰先生顕彰会　丸川松陰伝
△緒方洪庵伝　緒方富雄著
△鎌田玄渓遺徳顕彰会　鎌田玄渓遺徳顕彰会
△竹山屋清兵衛・竹山屋清七　竹山屋清兵衛・竹山屋清七
△明廬全集・朗廬年譜抄より
△西山拙斎伝　拙斎翁年譜より
△川田甕江伝　豊江川田剛遺徳顕彰会
△聖良賓と玉島　倉敷文化遺産・森脇三之
△山田方谷　フリー百科事典ウイキペディア
△小野光衛門　フリー百科事典ウイキペディア
△雲井　フリー百科事典ウイキペディア
△伊能忠敬　フリー百科事典ウイキペディア
△三島中州　フリー百科事典ウイキペディア
その他　真鍋昌弘・新修倉敷市史

製作年月日　平成二十四年八月十四日
製作者　井形　雅典